

太平記における程嬰・杵臼の説話

増田

欣

太平記にみえる中国の説話には、その源泉を史記に求めうるものがかなり多い。漢楚合戦と呉越合戦の説話については先に発表したが（注1）、史記と太平記とのかかわりかたは複雑であって、やはり個々の場合の精査から出発せねばならない。

文学の比較研究においては、源泉と受容者とをつなぐ媒体の追求が殊に重視されるのであるが、古典の場合、その媒体もすでに佚亡したりして捕捉しがたくなっているのがむしろ普通である。ということは一見直接の影響関係と考えられる場合でも、なお中間項の

存在を疑ってみる必要があるということでもあろう。ここに取りあげた程嬰杵臼説話は、源泉を史記に発しながらも、その間に何らかの媒体の存在を想定せざるをえない顯著なケースの一例である。

注1、「太平記における漢楚の故事」(国文学叢、昭34・11)
 「太平記における呉越説話」(広島大学付属福山高校研究紀要、昭35・6)

程嬰杵臼の原話は史記の趙世家にある。その梗概が日本古典文学大系『太平記』の補注(巻十一)に要領よくまとめられているので、それを参酌し、話を三段に分けて掲げよう。

Ⅰ晋の景公の時、大夫屠岸賈が趙朔の一族を滅したが、趙朔の妻に遺腹があった。

Ⅱ趙朔の客の程嬰と杵臼とは趙氏の復立を図り、杵臼は他人の子

(第一表)

I			段 項	作品
3	2	1		
屠岸賈、諸將とともに趙氏を下宮に攻め、その一族を滅す。朔の妻に遺腹あり、妻、逃げて公宮に入る。	韓厥、屠岸賈の乱逆を諫むるも買聴かず。厥、趙朔に逃亡を勧む。朔肯んぜず。	晋景公の三年、大夫屠岸賈、賊首趙盾の子孫が朝に在るを不当なりとして趙氏を誅せんとす。	史記(趙世家) 〔ただし前後の記事を省略する〕	新序
◎	◎	◎		苑
◎	◎	◎		唐物語
○		△		太平記
×		×		曾我物語

を趙の孤児(趙武)と詐ってこれと共に山中に匿れ、程嬰はその在処を訴え出たので、屠岸賈は杵臼と賈の孤児とを攻めて、二人を殺した。

Ⅲ程嬰は山中に匿れて趙武を養育すること十五年、遂に趙武とともに屠岸賈を滅した。その後、程嬰は景下の趙盾(趙朔の父)と杵臼に報告しようとするが、自害した。

右のような梗概である。春秋(成公八年)には「晋、其ノ大夫趙同・趙括ヲ殺ス」とあるだけであり、左伝はやや詳しく述べているけれども、程嬰杵臼の苦節はまったく記されていない。宋の洪遵は、史記の記述が年代的に顛倒することを指摘して、「其ノ乖妄ナルコト是ノ如シ。嬰・杵臼ガ事ハ乃チ戰國ノ俠士刺客ノ為ス所ニシテ、春秋ノ時ノ風俗ニハ此レ無シ」(容齋隨筆、巻十)と言い、左氏会箋にも、史記の叙述における九箇条の誤りを列挙した上、「小説家ノ語ニ屬ス」と非難して、史実としての信が置かれていないが、とにかく文献としては史記が嚆矢である。

ついで前漢の劉向の新序(巻七、節士)と説苑(巻六、復恩)に取りあげられており、わが国の作品では太平記(巻十八、程嬰杵臼事)のほかに唐物語(下巻)と曾我物語(巻一、杵臼程嬰が事)とに詳しい叙述が見られる。史記の叙述をさ

備考	II				I								
	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	
<p>◎は史記と文辭もほぼ一致しているもの。○は説話内容の近似しているもの。</p> <p>△は繁簡その他かなり相違のあるもの。●▲は○△と同題の叙述の上に原話にない説話の附加されているもの。×は原話と対蹠的な相違を有するもの。</p>	趙武成人す。程嬰、諸大夫を辞し、趙の復立を地下の趙盾と杵臼に報ぜんとして自害す。武、三年服喪す。	程嬰・趙武、屠岸賈を攻めて其の一族を滅す。景公、武に故の田邑を賜う。	諸將、景公を見舞う。景公、諸將を脅かし趙武を見す。諸將、懼れて屠岸賈の旧悪を告ぐ。	十五年後、景公疾む。韓厥、趙氏の祟りなりと説き、趙武生存の事実を告ぐ。景公、厥とともに趙氏の復立を謀り、趙武を宮中に匿す。	程嬰、真の孤兒（趙武）とともに山中に匿る。	杵臼、程嬰を罵り、自分を殺して孤兒を助けよと言ふ。諸將、許さずして二人を殺し、趙氏の跡を断つたと信ず。	諸將、師を發して、程嬰に従い、杵臼を攻む。	程嬰、諸將に、千金と引替えに孤兒の在所を教えんと告ぐ。諸將快諾す。	杵臼程嬰ともに謀つて、他人の子を取つて、負つて山中に匿る。	杵臼、程嬰に「孤兒を立つると死すると何れか難き」と問う。程嬰、「死するは易く、孤を立つるは難し」と答ふ。杵臼、程嬰を難きに就かしめ、自分は易きに就いて先に死なせんとする。	趙朔の妻、男兒を生む。屠岸賈これを聞いて宮中を探索す。朔の妻、兒を袴中に隠して難を免る。	趙朔の客杵臼、程嬰に死せざる理由を問う。程嬰、「朔の遺兒が男ならば之を奉り、女ならば徐に死なせ」と答ふ。	
	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	○	△	○	△	○	○	○	○	△	○	○	○	△
	△	△	○	△	×	△	△	△	×	○	○	○	
	△	△			×	△	△	△	×	●			

らに細かく分析して、これら諸書との異同出入を示すと、第一表の

かに、平治物語（卷三、頼朝義兵を挙げらるる事並平家退治の事）

ごとくなる。

表に明らかなように、新序はそのまま史記によっている。措辭の上に微細な相違がみられるけれども、それは依拠したテキストにもかわる問題といえよう。説苑はIIのほとんど全部とIIIの結末部とを割愛しているが、これは韓厥の報恩説話として構想しているためで、この点、素材的には左伝の記述に似ているけれども、直接の典拠は史記である。唐物語は史記の叙述を諷訳したもの。直訳的な訓み下しではなく、また部分的にはかなり簡約化しているが、おおむねは史記の叙述に即して和らげたものである。太平記に先行するものとしては、唐物語のほ

に「趙の孤児は袴の中に隠れて泣かず」とあるのや、源平盛衰記（卷二十、佐殿大場勢汰事）に「程嬰頓ニ義ヲ於趙武ニ」とあるのなど、比較修辭法による断片的な引用がある。こういう断片的な引用がまかり通る背景には、享受者の側においてもこの説話に関する何がしかの知識が共有されていたはずで、説話伝承が露頭しているものと考えるべきであろう。

二

さて、高橋貞一氏は、史記と関係のある太平記の説話のうちで、この程嬰杵臼説話は、「他の場合に比して、やや史記との相違が大である」と言われている（注上）。では、どういふ点が類似し、どういふ点が相異しているのかを検討してみると、第一表に見るよう

(一)史記にあって太平記にないもの——Ⅰ2、Ⅰ4・5、Ⅰ12・13

(二)史記と対蹠的な相異をもつもの——Ⅰ1・3、Ⅰ7・11

(三)史記と類似しているもの——Ⅰ6・8・9・10、Ⅰ14・15

の三種に分けることができる。特に問題になるのは、(二)の対蹠的な相異点であり、なかならずⅠの7と11とである。

【7】での相異は、史記では程嬰杵臼が謀って他人の子を趙氏の孤児（趙武）の身代りに立てたのに対し、太平記では杵臼が我が子を趙武と詐り称したという点である。太平記卷十一には「昔程嬰か我が子ヲ殺テ、幼稚ノ主ノ命ニカヘ」（五大院右衛門并相模太郎事）とあって杵臼ではなく、程嬰が我が子を身代りに立てたことになっている。曾我物語も同様である。ところが太平記卷十八の場合

さらハ謀ヲ廻スヘシとて杵臼ハわが子ノ三歳ニ成リけるヲ主ノ孤なりと披露ノ是ヲいたきカムへていエイハ主ノ孤ノ三ヲニ成リけるヲわが子なりと云ヒて朝夕是ヲソヤういくしける。（神田本）

となっていて、杵臼がわが子を身代りに立てたとしか解釈できない。ただ西源院本は「是ヲイタキカムヘヨ」とあり、杵臼に向かつて言った程嬰の言葉と考えるならば、「わが子」を程嬰の子と解することもできるが、前後の文脈から見ても、これを程嬰の言葉と考えることは不可能である。また篠田本には、杵臼と孤児とが死んだ後に、「これすなはちていぬいか子なり」とあるが、これは「真の孤児ではない」旨の後人の注記が本文に混入したものと考えられる。

当該箇所に関しては、管見では諸本いずれも同様である。唐物語には単に「おさなき子をひとりいたきて」とあるだけで、特に「他人ノ嬰児」（史記）とは断っていない。唐物語の書きぶりから太平記や曾我物語のような程嬰（または杵臼）がわが子を犠牲にする話へと発展する可能性はじゅうぶんあるけれども、これはわが国だけでなく、中国においても伝承されていた形なのである。明代の演義小説である新列国志は、その第五七回から第五九回にかけてこの史話を講釈しているが、それには、杵臼が程嬰に「他人の子供を得て趙の孤児と詐り、自分はこれを抱いて首陽山に隠れよう。汝は屠岸賈にその隠れ処を訴え出よ」と謀ったところ、程嬰は「自分には生まれて間もない子供がある。趙の孤児とは誕生日も相近いし、身代りに立てられよう」と言って、わが子を杵臼の手に渡すくだりがある。すなわち、杵臼の言葉は史記に近く、程嬰の言葉は太平記・曾我物語に類似するものであるが、いったい新列国志は史記の記述を

補填するところが多く、前代の演義小説や俗講の説話内容を多く含みこんでいると考えられるのであり、これもその一例で、新列国志の叙述は史記とその伝承説話を統合したものと思われる。事夷、明代以前に、そのような伝承が存在していた。元代の雜劇に「趙氏孤兒」（紀君祥撰）という曲があり、殊に有名で、夙に歐洲で流行し、独訳本・仏訳本がある由であるが（注2）、この劇の第二折（二番）に、屠岸賈が禁中から姿を消した孤兒を捕えるために、国内の生後一か月以上半歳未滿の幼兒をことごとく拘引して殺害しようとする。程嬰はおそれて、公孫杵臼を訪ね、

（上略）念程嬰年近四旬有五。所生一子。未經滿月。待假粧做趙氏孤兒。等老宰輔告首與屠岸賈去。只說程嬰藏匿孤兒。把俺父子二人。一処身死。老宰輔慢慢的擲拳的孤兒成人長大。與他父母報讎。可不好也。

と謀る。すなわち「程嬰、年も四十五に近づいて、生みたる子供の未だ一月にならねど、これを趙氏が孤兒によそひ立てんに、貴殿は屠岸賈に訴え出て、ただ『程嬰、孤兒を匿まへり』と申すべし。われら父子二人をば諸共に死なしめよ。貴殿ゆるゆると養ひ立てたる孤兒の人とならば、彼が父母のために讎を報ずべし、と思ふは如何に。」と謀るのである。そこで杵臼は、孤兒が復讐し得る二十年先には自分は九十歳、それまでの命もおぼつかないと答えて、程嬰と役割りを交替する、という場面がある。程嬰がわが子を犠牲にするという話は、史記や新序など中国の正統的な作品には見られないが、俗文学の世界には伝承されていたわけである。それにしても、太平記や曾我物語に見られるこの形が、そのような中国での伝承と関係があるのか、それとも単なる平行現象なのかという点が問題と

ならう。

そこで「[11]」の場合を検討してみよう。史記では、程嬰が千金と引替えに孤兒の在処を諸將に告げてこれを討たせたあと、真の孤兒を抱いて山中に匿れたことになっているが、太平記では程嬰はもともと詐って屠岸賈の臣となり、匿の孤兒の在処を告げて敵にとり入り、孤兒を討たせた後はいよいよ重用されたという話になっている。曾我物語も同様である。「趙氏孤兒」第三折の幕切れには、程嬰の手引きで杵臼と孤兒（程嬰の子）とを討った屠岸賈が、「程嬰よ、汝は我が心腹の人ぞ。我が家中に在って一門客とり、汝の其の子（実は趙武）を一人前に育てあげ、汝の許で文を習わせ、予の許によこして武を習わせるがよい。予も亦かれこれ五十歳となるに、なお世嗣がない。そこで汝の子を予の養子にしてはくれぬか。予もかかる歳なれば、ゆくゆく予の官位も亦汝の子に襲がせたい。汝の意向や如何に」に言い、程嬰がこれを快諾する場面がある。やはり太平記・曾我物語と同趣なのである。新列国志はむしろ史記に近いが、それでも、

岸賈欲^ニ留^メ用^レ之^ヲ（注、程嬰）。嬰流^シ泣^ク言^フ曰^ク、
小人一時貪^リ生^ヲ怕^レ死^ヲ、作^シ此^レ不義之事^ヲ、無^ニ面^目、
復見^ニ晋人^一、從^リ此將^ニ、糊^ニ口^ヲ、遠方^ニ矣、程嬰辭^シ了^ル岸

賈^一。
という記事があつて、ここにも史記と伝承説話を統合した痕跡を認めることができる。

右に検討した二例を併せ考えるとき、元曲や新列国志に伝承されたもの、説話が何らかに媒介されて太平記や曾我物語に定着したと

推測するのが自然であろう。元曲以前の講釈本で、この素材をとり扱った作品の存在については管見にして知らないけれども、元曲の主題が変文系統の説唱や唐代小説類に拠っていることは既に言われていることであり、例えば川口久雄氏が伍子胥変文について、

そもそも伍子胥のことは史記や吳越春秋に見え、これらの史書の記述にいろいろの民間伝承が加わって唐末五代において軍談講釈として語られ、これらがもとになって元雜劇以下（注、元曲「伍員吹簫」や明の「拳鼎記」等）に展開したと見られる。

（注3）

と言われているのと同様の展開を、元曲「趙氏孤児」や同じ主題の明曲「八義記」（徐叔回撰）の上に予想することは可能である。変文は、絵画を伴ない、それを指し示しながら語られたものであるが（注4）、「趙氏孤児」第四折は、程嬰が二十年前の趙氏の悲劇を一卷の絵巻に仕立てて、今は成人した程牧（実は趙武）に詳しく絵解きをし、はじめて事の真相を告げて復讐を勧めるといふ舞台であつて、これこそ、「趙氏孤児」の粉本となつた変文の存在を暗示するものではあるまいか。

青木正児博士は、わが国の軍記物語に見える中国の説話について、「吾人の之に対する一つの興味は若干支那小説の影響が窺はれる事である」として、「燕丹子」「枕中記」「青鎖高議」等の支那小説をあげておられる（注5）。なかんずく燕丹子説話（源平盛衰記巻十七始皇燕丹并咸陽宮の事、平家物語巻五咸陽宮の事、謡曲「咸陽宮」）のごとき、原話が史記にありながら、それには拠っていないという点が注目されるのであり、この程嬰杵臼説話もまた、これと同様のケースとして、史記と直接にかかわり合ふものではなく

して、その間に支那小説の介在を想定すべきものであろう。それが、青木博士の挙げておられるような、いわゆる文言小説であるか、それとも変文のごとき白話小説であるか、何の確証もないが。

注1、高橋貞一氏「太平記の典故に関する研究」（京都市西京高校研究紀要、昭34・8）

注2、鄭振鐸氏「中国文学史」第三冊（第四、六章雜劇の鼎盛）。なお、この劇のフランスにおける盛行については、後藤末雄氏『支那文化と支那学の起源』（第四篇の四、ヴォルテールの支那観）に詳しい説明がある。

注3、川口久雄氏「伍子胥変文と我が国説話文学」（国語、昭32・4）

注4、むしやこうじ・みのる氏「物語と物語絵（一）中国のばあい」（文学、昭32・6）

注5、青木正児氏「国文学と支那文学」（鎌倉室町期、「支那文学芸術考」所収）

三

上に述べたように、史記と太平記との間に介在する支那小説の存在を想定し得るとしても、それと太平記とのかわりあひは、なお直接的なものではない。太平記のこの説話が書承によるものでないことは、その登場人物の名前の異同に端的に顯われている。すなわち太平記の、その発端部「[一]」は、

昔秦（流布本「晋」）ノ世ニ趙道智伯ト云ケル物二人、趙ノ国ヲ争コト年久シ、或時智伯已ニ趙通ニ取巻レテ、夜明ケナハ打死セムトシケル時、（[一]の一部分を含む。本文は西源院本）

となつていて、この説話の敵役たる屠岸賈の名が趙盾になり、屠岸賈に討たれた趙盾の名が智伯となつている。趙盾というのは実は趙盾の父であつて、太平記鈔が「此故事ノ中、大方ハヨキ様ナレトモ、語已下敵味方カ紛レテ何レモ誤レリ」と非難しているのはこの点である。また智伯を登場させたのは豫讓の復讐説話と混同したためである。

豫讓の説話は、韓非子（姦弑弑臣第十二）をはじめ呂氏春秋（恃君覽第八）、淮南子（卷九主術訓他）、史記（刺客伝）、戦国策（卷六上襄子）、説苑（卷六復恩）、蒙求（卷中豫讓吞炭）等にあつて有名であり、十訓抄（卷六可存忠直事）にも断片的ながら引用されてゐる。豫讓は尊寵された主君智伯が趙襄子に滅されたので「士ハ已ヲ知ル者ノ為ニ死ス」と復讐を誓い、姓名を代え刑人となつて宮中に入り、圓中に潜んで狙うが発見される。襄子が饒人なりとして釈放するや、また身に漆を塗つて腐となり、炭を呑んで腫となり形状を変えて橋下に待ち伏せるが、襄子の馬が驚いて再び発見される。このたびも襄子は許すが、豫讓は請うて彼の衣服をもらひ、これを劔で三たび撃ち、智伯の恩に報い得たとして自害する、という恐しく執念深い復讐説話である。これは程嬰杵臼よりも一世紀あまり後の事件で、智伯を滅した趙襄子は、趙盾六代の後裔である。太平記は趙盾と趙襄子を混同し、そこから智伯を登場させるといふ過誤をおかしたのである。

太平記卷十一（五大院右衛門并相模太郎事）には、自害を前にして北条高時が、嫡男那時の生母の兄に当る五大院右衛門宗繁に那時を托して「何ナル方便ヲモ廻ラシテ、此ヲ隠置テ、時至メト見ヘハ取出テ、亡魂ノ恨ヲ謝スヘシ」と依頼し、五大院は領状して敵に降

るが、北条氏の縁者を匿まらう者が次々と誅される事態に恐れて「イヤ、果報尽ハテタル人ヲ扶持セムトテ適通タル命ヲ失ハシ、ヨリハ、此人之有所知タル由ヲ源氏ノ兵ニ告テ式ナキ処ヲアラハシテ、所領ノ一所ヲモ安堵セハヤ」と願ひ、那時をすかし出して伊豆へ落し、敵にその在処を告げて、これを討たせた話がある。まさに程嬰杵臼説話をそのまま裏返したような話である。この事件は太平記以外に所見がないが、あるいは史実を種にして、程嬰杵臼の説話を否定的に媒介して形成されたものかもしれない。それはともかく、太平記作者のこれに対する評言に、「昔程嬰カ我子ヲ殺テ、幼稚ノ主ノ命ニカヘ、預讓カ己カ貌ヲ変シテ旧君之愆ヲ報セシ、ソレマテコソナカラメ、云々」と、この両説話が対向仕立てで比較修辭法に用いられているのは、はなはだ興味深い。この対向表現からも、この二つの故事が同じく亡君の旧恩に報いる無償の苦闘を生きた節士の説話として並び伝えられていたことが想像される。そしてそこに、太平記作者が両説話を混同した蓋然性を見ることができるのである。

登場人物の名前が、程嬰と杵臼をのぞいては甚しく異なつてゐるという点は、曾我物語も同様であるが、太平記と曾我物語とはまた相異なつてゐる。すなわち、太平記の智伯（史記は趙朔）が孝明王となり、趙盾（史記は屠岸賈）は単に（ならびの王）とだけで名前がなく、孤児の趙武（太平記には名前がない）が屠岸賈となつて、これこそ「敵味方が紛レテ」いゝのである。また身代りになる程嬰の子にはきかくという名がついてゐるが、孝明王やきかくの名の出所は審らかでない。かく主要人物以外の名前が甚しく流動してゐることは、この説話の伝承のありかたを考へる上で看過すること

のできない事象であり、あらためて後に触れてみたいと思う。

四

それに先だつて、太平記と曾我物語との関係を検討しておきたい。いったい太平記は曾我伝説の本筋には関係がないけれども、傍系説話とは交渉を有しているとされている(注1)。今両者の関連説話を拾いあげてみると、つぎの八例が得られる。

	曾我物語(流布本)	太平記(流布本)
1	杵臼程嬰が事(巻一)	程嬰杵臼事(巻一八)
2	支宗皇帝の事(巻二)	楊国忠事(巻三七)
3	奈良の権操僧正の事(巻二)	三人僧都関東下向事(巻二)
4	眉間尺が事(巻四)	干将鎮御事(巻一三)
5	巢父許由が事(巻五)	天竺(震旦)物語事(巻三二)
6	呉越の戦の事(巻五)	呉越軍事(巻四)
7	比叡山始の事(巻六)	比叡山開闢事(巻一八)
8	菅丞相の御事(巻一一)	聖廟御事(巻一一)

これ以外に、同一人物に関する説話で、話材の無縁なものが三例あるけれども、省略に従う。上の八話のうち、同文関係を認めうる説話は、(6)(7)(8)(但し(8)は曾我物語では極めて簡略化されている)の三者だけで、他の五者は類話というに過ぎない。しかも交渉関係を

認めうる三者は、いずれ曾我物語の流布本にのみあって、大山寺本には見えぬものばかりである。曾我物語に与えた太平記の影響はその流布本に限られているとする江波瀧氏の御意見(注2)に同調する所以であるが、ただ氏が程嬰杵臼説話をもその例に挙げられている点は、荒木良雄氏の紹介による大山寺本の出現によって、訂正されねばならなくなっている。真字本にこそないけれども大山寺本にはすでに載っている、この程嬰杵臼説話は、太平記の影響を受ける以前から曾我物語にあったものなのである。なお、登場人物の名前の相異のみにとどまらず、両者の叙述に聊かの同文関係も認められないことは第二表に掲げた本文の対照からも容易に納得がえらると思ふ。

それにも拘らず、第一表に見るように、両者の構成は著しく似通っている。太平記が割愛したものは曾我物語も省いているし、史記と太平記との対蹠的な相異点も、すべて曾我物語は太平記の側に属している。そして史記と太平記の類似事項は曾我物語もやはり同様なのである。ただ曾我物語には「I 6・10」の部分に説話の膨脹が見られる。これは、趙の孤児になりかわる程嬰の子さか、可憐味と、親子の悲壮な情愛とが強調されているもので(第二表参照)、主君と家来、敵と味方に分かれての応答に親子の心底を吐露するあたり、菅原伝授手習鑑の寺小屋の場へと発展する方向を示しているが、この二箇所における付加的要素を除くならば、太平記と曾我物語とは全く同じ構想になる。

この説話の受け入れかたが、太平記も曾我物語も、書承によるものでないことは、先に見たごとく、人物名に見られる過誤が端的に示している。成立年代のさまで距たらないはずの両作品にあらわれ

史記	新序	唐物語	太平記	曾我物語
<p>程嬰謂公孫杵臼曰、今一索不得、後必且復索之、奈何。公孫杵臼曰、立孤與死孰難。程嬰曰、死易立孤難耳。公孫杵臼曰。趙氏先君遇子厚、子盪為其難者。吾為其易者、請先死。乃二人謀、取他人嬰兒、負之、衣以文葆、匿山中。</p>	<p>程嬰謂杵臼曰、今一索不得、後必且復索之、奈何。杵臼曰、立孤與死孰難。程嬰曰、立孤亦難耳。杵臼曰、趙氏先君遇子厚、子強為其難者、吾為其易者、請先死。吾請先死。而二人謀、取他嬰兒、衣以文葆、匿山中。</p>	<p>程嬰に杵臼語らひて曰く、「この子を事なく養ひ立て、父の跡を嗣がせんと、命を捨てんと何れか難かるべき。」程嬰答へて曰く、「死なんは易し、平かに養ひ立てん事はいと難し」と言ふに、杵臼が曰く、「恩の深き事は君我に勝れり。易きにつけても、我まず死なば、その後難事を遂げて必ず難を報ひ給へ」と言ひつゝ、幼き児を一人抱きて、深き山の中に匿れるたり。(説類從本。但し適宜漢字を当てる。)</p>	<p>程嬰是ヲ恐レテ、杵臼ニ向テ問ケルハ、 「旧君三歳ノ孤ヲ以テ、二人ノ臣ニ託タリ、死ヲ敵ニ欺カムト、暫ク生テ孤ヲ取立ムト、イツレカ難カルヘキ」ト云ニ、杵臼答テ曰ク、「死ハ一心ノ義ニ向フ処ニ定リ、生ハ百慮ノ智ヲ尽シ中ニ全シ、而レハ我生ヲ以テ難トス」程嬰「サラハ我ハ難ニ付テ命ヲ全スヘシ、汝ハ易ニ就テ先打死ラセヨ」ト云ニ、杵臼悦テ許諾ス、サラハ謀ヲ廻スヘシトテ、杵臼ハ我子ノ三歳ニナリケルヲ主ノ孤也ト披露シテ、是ヲイダキカマヘヨ、程嬰ハ主ノ孤ノ三ニナルヲ我子也ト云テ、朝夕是ヲ養育シケル、(西源院本)</p>	<p>程嬰が申しけるは「我等二人が中に一人、敵の主に出でて仕ふべしといはん時、さる者ありとて定めて心を許すべからずその時われ、きかくといひて十一歳になる子を持てり。幸に君と同じ年なり。これを太子と号して、二人が中何れにても一人山に籠り、一人は討手になりて、二人の首を取りて、かの王に捧げなば、如何でか心を許さざるべき。その時敵を討つべし」といひ定むるぞ、せめての事とは覚えける。その後程嬰わが子のきかくを近づけて、「いかに汝、委しく聞け。わが君の太子屠岸賈を隠しかね奉り、汝等までも敵に捕られて失せぬべし。然るに汝を太子と偽りて害すべし。太子の御命に代り奉りて、君をも我らをも安穩ならしめよ。親なればとて添ひ果つべきにもあらず。来世に生合ふべし」と申しければ、きかく涙を流し、暫しは物をも言はず。やゝありて、「辞し申すべき事にあらず。まことに某が命一つを、君と父との御命に代へん事喜びなり」とはいひながら、涙にこそは咽びけれ。父この言葉を聞きて「子ながらもいしく申したるものかな。まことにわが子なり。成人の末、惜しむに餘あり。最後未練にては、父がため君の御為悪しかるべし」と涙を押へて申しければ、きかくも流るる涙をとどめ「御心安く思召候へ」とぞ申しける。「つらつら事を案ずるに、まづ君の為に討たれん命は易く、残りて敵を討ち、太子を世に立て申さん事は重んじ。されば輕きに就きて、先ず杵臼死なん」といひて、きかくと共に山に籠りて居たり。(大山寺本)</p>

たこの説話が、ほとんど一致する構想を有しながら、その表現にはいささかの同文的關係をも認めがたいという、この事実を考えると、永積安明氏が、

必ずしも中国の古典から、直接的に『太平記』へと考えるだけでは十分でなく、やはりその間に口語りの媒介を考えることが必要であろう。ただ、この口語りも（中略）むしろ作者を外布から規定する、いわば外在的なものとして働いているというのが、『太平記』と口語りとの関連のしかたである。（注3）

と言われた、その口語りの存在を想定せねばならなくなる。が、その口語りなるものも、語りとして言語的に一応定着しているものとしては思ひえがくことができない。骨組みは固定しているけれども、語りそのものは極めて流動的なものであったと考えざるを得ないのである。

注1、後藤丹治氏「曾我物語私考」（第一節、曾我物語に於ける史実の検討、『中世国文学研究』所収）

注2、江波熙氏「曾我物語に就て」（『国語と国文学』大正15・10）

注3、永積安明氏「『筆記もの』の構造とその展開」（『国語と国文学』昭和35・4）

五

史記の叙述と太平記・曾我物語の叙述を比較して、後者が割愛している部分を見ると、結局それは、趙朔の妻に関する説話と韓厥に関する説話の凡てであり、かつそれに限られている。これは説苑が韓厥の報恩説話として構想するために程嬰杵臼に関する部分をほと

んど削り去ったのと甚だ対照的であつて、太平記・曾我物語はあくまで程嬰杵臼の説話として構想するために不要なものは切り捨てたという結果になっている。そして趙朔の妻および韓厥に関する説話を削除したことが、必然的に他の部分にも波及して、すなわち、太平記・曾我物語では、程嬰杵臼が亡君の遺言を奉じて孤児を守り立てようとして謀つたことになっているが、史記では趙朔が後事を託した相手は韓厥であり（Ⅱ2）、程嬰杵臼は自発的に旧恩に報いようとしたことになっている（Ⅱ4）。また、史記では趙朔が討たれたときその妻の胎内にある趙武が、太平記では三歳、曾我物語では十一歳の男児になっている。こうした変形が生ずるためには、韓厥および趙朔の妻の抹殺が前提となっていなければならないし、曾我物語のようにきかくの可憐味が強調されるためには、これと同年の孤児が十一歳という物心のついた年齢に達していることが前提とならねばならない。

ということは、恐らく、史記の叙述の如き複合的なプロットを有する物語りとしては伝承されていなかったであろうという推測を支援する。程嬰杵臼を中心とする説話、趙朔の妻を中心とする説話（これは平治物語に断片的にあらわれている）、韓厥を中心とする説話（たとへば説苑に見られる如き）が、史記のような複合的な叙述から派生して、それぞれ単一的なプロットしか持たぬ口語りとして伝承されていたに違いない。太平記・曾我物語は、そのうちの一つ、程嬰杵臼説話をとりあげたに過ぎなからう。

説話がいかに流動しても、その本質的なものは変らない。この程嬰杵臼説話に即して言えば、

一、亡君の遺孤を立てるために、杵臼は賈の孤児と共に先に死

二、事を遂げた後、程嬰は杵臼との義を守って自害した。

という二点である。特に第一の点はこの説話の最も中心的な核なのである。【I6】がこれに当る。第二表は、諸作品のこの部分を対照したものである。(史記・新序・唐物語はⅦ7の全部を、太平記・曾我物語はその一部を含む)。しかも核に当る部分には、さらにその中心となる、さわりとも言うべきせりふがある。この場合には「死は易く、生は難し」という逆説的命題である。

常識的には「死は難く、生は易し」とされる。史記では、杵臼がまず常識的には困難とされる死を選んで、自からそれを安易な道に就くのだとし、程嬰には難しとする生を選ばせることによって、相手の矜持を尊重し、しかも相手に対する絶対の信頼を表明している。ところが太平記では、難しとする生を程嬰自身がまず選び、相手には「易ニ就テ先打死セヨ」と薦めているのである。難事を他人に強いて自分は安易に就くという利己主義は、この説話にはふさわしくないとする常識が働いたのであろうが、そのために杵臼の細心周到な配慮が抹殺されてしまっている。この点からも想像されることは、史記に見られるような簡潔な表現にひそむ複雑な心理の陰影を洗い晒したさわり文句を核心として、いわば警句的な魅力に支えられて、この説話が伝承されたのだらうということである。実際、太平記では程嬰杵臼が智伯から孤児を託された所(Ⅰ3)でも、また曾我物語の流布本では、上掲(第二表)本文(大山寺本)冒頭の程嬰の言葉の後に杵臼の返答が入っているが、そこでも、この警句が、表現にはいくらかの変化を見せながら、それぞれ繰り返されている、伝承者がこの言葉の呪縛から離れ得なかつたことを暗示しているのである。

警句「死は易く、生は難し」という逆説的命題を核心とし、固定した骨組みをもつて伝承されていた程嬰杵臼の故事を、語りものと

して具体化するためには、主要人物以外の名前をも補わなければならなかつた。その際に不確かな記憶で補填して豫讓の復讐説話と混同してしまつたのが太平記であり、でたらめな(と見える)名前をほうり込んでゐるのが曾我物語である。

単一的なプロットをしか持たぬ簡単な口語りとして伝承されてきたであらうという推測は、この説話の太平記への挿入のされかたからも、うなずけるのではないかと思う。

建武の新政もつかの間に崩壊して、建武三年の暮れには、後醍醐は吉野に潜幸し、新田義貞は東宮および親王尊良を奉じて越前へ落ちるが、翌延元二年正月にはその居城金崎城を高師泰に攻め立てられて苦戦におちいる。太平記によると、これより先、瓜生判官保の弟の義鑑房は官方に意を通じて、義貞の弟脇屋義助の長子義治を預かつていたが、正月十一日、かねこの約束どおり金崎城後攻のために敦賀に向かい、高師泰の軍と戦つて、判官保と義鑑房の兄弟は討死する。残る第三人とともに討死しようとするが、義鑑房に「我等二人打死シタラムハ一旦ノマケ、兄弟残りナク死タラムハ、永世ノ負ニテ有ンスルヲ、思ヒ籠ル心ノ無リケルユウカヒナサヨ」(西源院本)と制止されて生き残る(注1)。太平記は、「(義鑑房が)堅ク制止シケル謂フ何ニト尋レバ」として、程嬰杵臼説話を引いているのであるが、瓜生一族の活躍と程嬰杵臼の行為とは、そんなにびつたりと重なり合っていない。この点については既に太平記理尽鈔にも指摘がある。すなわち両者の相異点を挙げて、「然レバ忠ト義ト智ト謀ト似ルベクモナキ事ナルヲ残シタル事、程嬰ガ生タルニ少シ似タレバトテ劣ベカラズト書ル事ハ如何ニ異国ノ者共、是ヲ見バ最ヲカシキトゾ思ハズラント也」と批判している。理尽鈔は

兵法とか武士道とかの立場から太平記を批判的に解説したもので、これもその一例である。大体、当時の在地武士たちの動きは、程嬰杵臼に比することのできるような純一なものではあり得なかった。天下を一統するのは宮方か、それとも武家方か、その帰趨もわからぬ混沌の中で、しかもその何れかへの帰属の決断を迫まられていた在地武士たちが、何とかして一族の保全を図り、さらには動乱に乗じて本所の圧制をはねのけ、勢力の飛躍的な拡充を狙う欲求から、此れに就き彼れに就きしていたわけで、中央の動静につれて揺ぐ瓜生判官保の動き（巻十七瓜生判官替事）にも、それは十分に顯われている。太平記巻二十八（三角入道謀叛事并鼓城熊故落事）には、高師泰に属して活躍する武士の中に「瓜生源左衛門」の名があり、同巻三十六（佐々木秀詮兄弟討死事）にも、佐々木道詮の子秀詮兄弟とともに戦死する「瓜生次郎左衛門父子兄弟三人」がある。この瓜生次郎左衛門（毛利家本には瓜生源左衛門）が、かつて宮方に属して脇屋義助のもとで活躍する「瓜生次郎左衛門尉」（巻十九義貞攻落越前府城事）と同一人物だとすると、彼れは義貞が討死して北陸道の宮方が潰滅した後は足利方に属したということになる。それが当時の反服常ならぬ在地武士としては最も自然な動きでもあった。太平記の語る所が事実であれば、義鑑房が義治を預り養ったこと、瓜生兄弟のうち二人は討死し三人は生き残ったこと、ただこの二点においてのみ僅かに程嬰杵臼の故事と類似しているに過ぎないのである。にも拘らず、この僅かな類似点が契機となって、程嬰杵臼説話に結びつき得たという事実は、この説話が、先にも述べたように、「死は易く、生は難し」として杵臼は先に死に、程嬰は生き残ったという点を核として伝承された、極めて簡單

なものでしかなかったことを推測させるのである。

注1、瓜生氏の活躍については太平記以外に所見がないが、かつて大西源一氏が歴史地理学の立場から考察された。「金ヶ崎城の籠城と柚山の義挙」（歴史と地理、第七巻三・四号、第八巻一、大正10・11年）

六

以上、裏づけとなる資料もないままに、想像に想像を重ねる結果となったが、源泉である史記と受容者たる太平記との間に介在するものとして、民間伝承をも孕み込んだ支那小説と、さらに単一的なプロットをしか持たぬ口語りとを想定した。仮説を提出して、御叱正をまつ次第である。

〔付記〕本稿は、昭和三十五年五月十五日、土井忠生博士還暦記念学会（於広島大学）で口頭発表したおりの草稿を、改めたものである。なお改稿にあたっては、永積安明氏の御示唆に負う所がある。記して謝意を表す次第である。

—— 広島大学教育学部付属福山高校教諭 ——